

LIGHT_{OF} LOVE

Overseas Project for the Blind - Plans and Reports

No.13

1998. 7

愛の光通信

東京ヘレン・ケラー協会 海外盲人援護事業事務局



●盲児とその成長を温かく見守る母親
(ネパール・バラ郡でのフィールドワークにて)

ネパール援護事業に向けられた 熱い支援に胸をうたれて

東京ヘレン・ケラー協会理事長 堀込藤一

6月下旬。私どもヘレン・ケラー協会が行っているネパールでの視覚障害者援護事業に対する国際ボランティア貯金配分決定通知式に出席するため、会場の郵政省に出かける日の朝だった。

私のデスクに、かわいらしい青いリンゴを散りばめたオレンジの色鮮やかな封筒があった。

◆…やさしい手紙…◆

差出人は愛知県幡豆郡一色中学校3年生の村松好さんと石川愛さん。

「私は先日、ヘレン・ケラー協会を訪ねる前に、協会が援助されているネパールのことを知ろうと、図書館で本を借りました。でも、のっているのは気候や地勢ばかりで、くわしい事情は知ることはできませんでした。しかし、協会を訪ね、どうしてネパールに援助しているのか、納得できました。アジアの中で、日本がどれだけ裕福な暮らしをしているかも、知ることができました。これから国際社会になっていく中で、私たちはもっと世界に目を向けなければいけない、ということが分かりました」(一部略)

一色中学校は、東京への修学旅行の2日目に、生徒が国際理解、福祉、環境…など、自主的に選んだテーマに沿った見学先を見つけて、グループ別に訪問学習をしたという。

ヘレン・ケラー協会のネパール援護事業と点字普及に興味を持った2人が、当協会を訪れたのだ。

私は、日々のニュースで荒れた中学校の実態が報道されるのに、この国の将来に大きな不安を持っていた。

だが、2人の手紙を通じて、この学校では生徒の間に、世界に開かれた目、弱者に対して優しいいたわりの心、環境問題に対する考え方などが育っているだろうと思い、その教育効果を感じとったのである。

そして、ネパールに対する私どもの援護事業が



●ヘレン・ケラー学院にて(中央が堀込理事長)

少しでも日本の教育にいい影響を与えているとしたら、こんな嬉しいことはない、と思いつつ、2人の手紙をポケットに入れ、郵政省に急いだ。

◆…郵政大臣とボランティア貯金…◆

式では、多くの配分団体の中から東京ヘレン・ケラー協会をはじめ、十団体が代表して自見庄三郎郵政大臣(当時)から目録を手渡された。

式の終了後、大臣は多忙な時間をさいて、私どもの懇談に応じて下さった。大臣は主として、各団体の活動を聞く役に回っていたが、かつて医師としてフィリピンの寄生虫駆除のボランティア活動に参加された体験を言葉少なく謙虚に語られた。そのさり気なく語る話を通じて、私は大臣のお人柄と、国際ボランティア活動に深い理解と情熱を持たれていることを感じ、朝の2人の手紙に続いて、また喜びがこみ上げてきた。

そして、全国の皆さんの善意の中から拠出されたボランティア貯金の配分金を、大切に効果的に使わせてもらわなければいけない、と肝に銘じて会場を去った。

そして協会へ帰る電車の中で、私は2人の手紙と大臣からいただいた配分決定通知の目録を交互に読みながら、久しぶりに心の充足する思いを味わったのである。

統合教育の現場から ～待たれる新寄宿舎～

現在、ネパール全土で視覚障害児の統合教育を実施している学校は26校あります。そのうち、私たちが直接支援を行っているのは寄宿制5校と通学制2校の計7校で、在籍している視覚障害児数は寄宿制が85人、通学制が5人の計90人。この数字からも明らかなように、多くの視覚障害児の就学を可能としているのは寄宿舎を備えた学校の存



●快適になったドゥマルワナ校寄宿舎

在です。その背景には、彼らは都市部に比べ貧しい地方において圧倒的に多く、家庭の経済的問題や交通アクセスの問題が就学の妨げとなっていることがあります。5校の寄宿制統合教育校では彼らの衣食住を無償で保証しています。

全土に3万人いると推計される就学適齢期の視覚障害児のうち、実際に就学の機会を得ているのは440人に過ぎない現状を鑑みますと、寄宿制統合教育校で学んでいる彼らは大変恵まれていることは確かです。しかし、設備などのハード面から見ると、彼らに快適な生活を提供している寄宿舎は多くありません。中には児童の健康上、かなり問題のある寄宿舎もあります。いずれにしても、彼らが授業以外の時間の大半をそこで過ごしていることを考えますと、寄宿舎の改善は決して手をこまねくことが許されません。

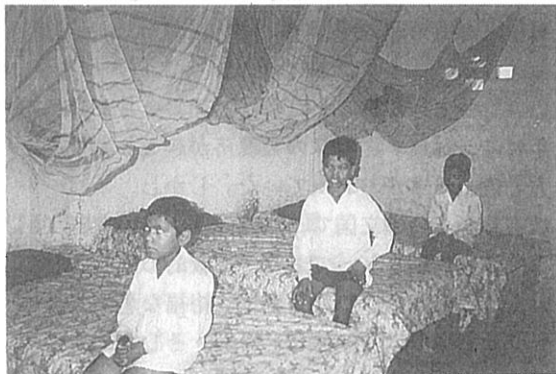
今後も続く寄宿舎建設

これまで私たちが行ってきた寄宿舎関係の事業として真っ先にあげられるのは、ナラヤニ県バラ郡のドゥマルワナ校の寄宿舎建設です。以前は空教室にベッドを持ち込んでの共同生活で、トイレもシャワーもない不便な生活を強いられていま

した。そこで、郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受けて、同校敷地内に寄宿舎を新築しました。男子部屋、女子部屋、学習室、食堂、台所、トイレ・シャワー室、宿直室を完備した1階建ての瀟洒な建物です。落成式には当時のネパールの副首相も臨席するなど、この建設はかなりのセンセーションを起こしました。

今後の事業としては、ロータート郡のジュダ校と釈迦生誕の地として世界的に知られるルンビニにあるシャンティ校においての寄宿舎建設を予定しています。特に元々は倉庫として使用されていたジュダ校の現在の仮寄宿舎の状況はまさに劣悪。現在16名の盲児童が生活していますが、そのトタン屋根の建物は狭い上に、天井までの高さも2メートル強しかなく、圧迫感を感じさせます。窓も小さいため部屋は常に暗い状態です。ただでさえ、雨季前の4～5月は40度を越える猛暑が続く上に、雨季に入ればしばしば洪水に見舞われる苛酷な気象状況に置かれており、寄宿舎で生活する盲児童の健康状況が心配されています。これまで事業予算の関係などで建設を見送ってきた経緯もあり、長年の懸案事項となっていました。この度、郵政省国際ボランティア貯金の配分金により、建設に着手できる運びとなりました。9月には槌音が響き渡っていることでしょう。

当事務局も建設の進捗状況を把握するため11月頃、当地を訪れる予定です。その時、学校関係者や盲児童と一緒に喜びを分かち合えることを今から楽しみにしています。



●元は倉庫だったジュダ校仮寄宿舎

第5回ヘレンケラー・サリバン賞 初代NAWB会長プラサド氏に輝く

東京ヘレン・ケラー協会は昨年10月1日、東京・高田馬場の千代田平安閣において、第5回ヘレンケラー・サリバン賞の「贈賞式」を行いました。今回の受賞者は、ネパール盲人福祉協会（NAWB）の初代会長であり、長年ネパールの障害者福祉に尽力してきたラクシュミ・ナラヤン・プラサド氏。

ケダール・バクタ・マテマ駐日ネパール王国大使をはじめ、臨席した多くの出席者から盛大な祝福を受けました。



●贈賞式でスピーチをするプラサド氏

「ネパール障害者福祉の父」と呼ばれるプラサド氏の歩みは、そのままネパールにおける社会福祉の道であるだけでなく、ネパール近代化の歴史にもびったり重なります。

日本ではあまり紹介されていない、ネパールの現代史を紐解きながらプラサド氏の足跡をたどってみました。（以下、『点字ジャーナル』1997年11月号《通巻第330号》より抜粋）

医師への道

プラサド氏が生まれたのは1930年1月20日、前年にニューヨークで株の大暴落が起こり、世界を大恐慌の暗雲がおおっていた。しかし、ネパールは古くからの独立国で、当時はラナ家の専制支配下で鎖国体制をとっており、比較的のんびりしていた。このような封建体制下、裕福な名門出身のプラサド少年は伸び伸びと育つ。そして地元の小学校を卒業した後、中学は隣町バルガニアの寄宿学校に学ぶ。子供の足で学校まで1時間半、4マ

イルの道程だった。そして高校はその町から列車で3時間かかるモティハリに、大学は同じく10時間かかるパトナにあった。パトナは釈迦が悟りを開いたブッダガヤに程近い大都市だ。プラサド青年は、ここで医師免許を取得した。

1939年に始まった第2次世界大戦で、ネパールは英国を支援し、インドは英連邦軍として参戦した。その勝利の余韻が覚めやらぬまま、インドは1946年に独立。そして、1日においてパキスタンがさらにインドから独立して血みどろの宗教対立が起こる。このような動きはカトマンズにも波及し、1951年に「ネパール維新」ともいうべき王政復古が起こり、ついに開国。しかしその直後、国王はスイスで客死。こうして、不安定な政治的状況下ではあったが、ネパールはゆっくり近代化に向けて歩み始める。

1954年、プラサド青年は医科大学卒業と同時に、カトマンズの国立ビル病院に赴任した。そこは当時この国唯一の総合病院で、彼はなんとネパール初の眼科医であった。幼いときから周りに目の不自由な人々が多く、なんとかできないかと考え続けてきた末のことであった。

英国留学と福祉事業

当時ネパールは近代化を急いでおり、将来を嘱望される青年を先進国に派遣していた。そして、プラサド医師にもその白羽の矢が立った。赴任して3年目の1957年、彼を乗せた英国行きの船は、インドの表玄関ボンベイをゆっくりと出帆。

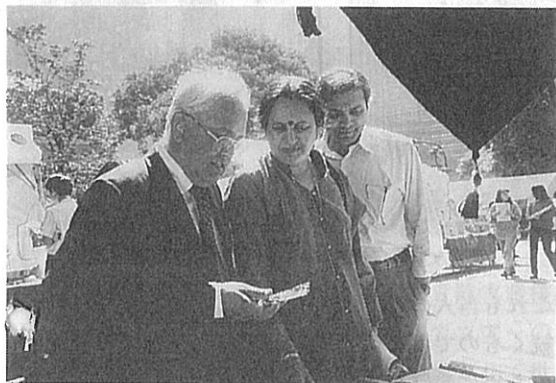
彼が政府から与えられた任務は、王立外科医学院で進んだ西洋医学を研修し、祖国の近代化に役立てることであった。その彼の留学中に英国は、国民保健サービスを充実させ、「ゆりかごから墓場まで」の福祉国家を実現する。彼は驚きと共にその一部始終をつぶさに見て大きな感銘を受け、まったく手付かずのネパールにおける保健と福祉事業を、どのように進めるべきか胸を大きく膨らませた。そして彼は、英国の眼科と耳鼻咽喉科の学位を取得する。

このように、英国における彼の留学は実り多いものであった。そんな帰国を間近に控えた1959年春、彼にカトマンズから驚くべきニュースが届いた。憲法を制定し、ネパール初の統一選挙が行われるというのだ。

彼が急ぎ帰国した数日後、ついにB.P.コイラを首班とする内閣が誕生した。これは英国の議会制民主主義の洗礼を受けてきたプラサド医師にとって、実に誇らしいものであった。このような政治的高揚の中、彼は国立ビル病院に帰ってきたのだが、留守中に彼のポストは新任の眼科医にゆずられており、彼は耳鼻咽喉科医を命じられた。

彼は期せずして、ネパール初の耳鼻咽喉科医にもなったのであった。そして、さらにコイラ首相の主治医にも任命された。ところが、あれほど期待した民主政治はたった17カ月しかもたなかった。

○翌1960年の暮れにネパールは、国王派のクーデターにより絶対王制に逆戻りする。



●家族と共に東京見物（日比谷公園）

彼は病院勤務のかたわら、牢獄の元首相を初めとする政治犯を週に1回検診し、それは彼らが釈放されるまで8年間続いた。このような不幸な政治状況ではあったが、彼は猛然と福祉事業に邁進する。手初めに彼は眼科医として、アイキャンプを開く。農村僻地を巡回して、その土地の公共施設を使って白内障の開眼手術を行うのだ。それは現在に至るまで脈々と受け継がれている。1966年にはネパール聾学校を創設、1969年にはネパール身体障害者・盲人協会の創設に参画。また、同時に赤十字や結核協会、それに児童協会等の理事も務め、多様な社会事業に意欲的に取り組む。そして、1981年の国際障害者年には、国内委員会の委員を務め、1985年にはネパール盲人福祉協会（N

AWB）を組織し、みずから会長に就任する。

一方、医師としても目覚ましい業績を残し、ネパール医学協会理事長、国立大学医学部教育委員長、ビル病院長、国王の侍医などを歴任。また、1968年に眼科手術研修のため初来日して以来、今回の贈賞式を入れて都合5回訪日。このため日本の友人も多く、大変な親日家でもある。1987年にはそれまでの失明防止活動が高く評価され、岩橋武夫賞も受賞している。

民主化の到来と平和への祈念

1990年、それまで地下活動を行って来た政党指導者は、民衆を組織して激しいデモによりネパール政府を攻撃した。そして、同年4月に国王は新憲法を制定し、政治の表舞台から退場することを表明。このときプラサド氏は、奇しくも当協会の招聘で来日中で、この突然の声明を東京で知ることになる。そして、翌1991年5月総選挙が行われ、G.P.コイラ内閣が誕生。首相は彼が敬愛した今は亡き、B.P.コイラの実弟で、閣僚もみな旧知の仲であった。前年に彼は病院長を定年退官していたため、同年、内閣の推薦により上院議員に任命される。

上院議員を1期務めた後、彼はB.P.コイラ眼科基金を設立し理事長を務める。そして、ライオンズクラブと協力して眼科研究センターを国立大学の医学部に開設。現在、その研究所長も兼任している。

筆者は、プラサド氏と三年ぶりに再会した。しかし、その間に随分耳を悪くされたようで補聴器が手放せず、歩行も心もとない。本人によると公式の書類上は1930年になっているが、本当に生まれたのは1927年という。驚いて年齢を伺うと実は70歳とのこと。ネパールにおいてはかなりの高齢で、「7人の孫と遊ぶのが、今は一番楽しい」と目を細める好々爺ぶりもみせた。

今回の賞金50万円は、それに同額の自己資金を加えてネパールの障害者を支えている健常者を顕彰する基金を新たに設立したいという。そしてその運営を、今回日本に同行した長男にゆだねる意向。また、現在「ネパールにおける障害者福祉」に関する執筆に忙しいとも語り、さらに今回の短い滞在の合間をぬって単独で広島を訪問。まだまだ元気で意欲的なところを我々にみせてくれた。

国際ボランティア貯金 預金者代表団の現地交流

私たち東京ヘレン・ケラー協会はネパールにおける視覚障害者援護事業を推進するため、平成3年より郵政省国際ボランティア貯金の配分金を受けています。郵政省では、配分金を受けた事業を視察するため、毎年、同貯金の預金者代表団を現地に派遣していて、私たちの事業も昨年までに2度視察を受けました。今回は(財)国際ボランティア貯金普及協会から交流団が派遣されました。カトマンズにある当協会の事業パートナー・ネパール盲人福祉協会(NAWB)の本部や、インド国境に近いナラヤニ県バラ郡で展開している視覚障害者リハビリテーション事業の拠点・バラCBRセンター、当協会が支援している統合教育校の一つでバラ郡にあるドウマルワナ校。交流団は、行く先々で人々の温かい歓迎を受け、目的であった現地交流は大成に終わりました。交流団の団長を務められた小堀正夫さんと、団員のひとりでジャーナリストの寺谷寛さんから感想をいただきましたので、ここに御紹介します。

現地交流で感じたネパールの“光と影”

小堀 正夫

年中白銀に輝くヒマラヤを仰ぐ釈迦生誕の地。
清らかな親しみを抱きつつ出かけた。

しかし現実のネパールは最貧国であった。GNP、所得格差、識字率の低さ、平均寿命にいたっては女性が短命の唯一の国、幼くして家事労働に追われ学校のない子供たち。

幼児婚や極端な女性蔑視。腹立たしさを押さえられない位の可哀相な「女の一生」である。子供たちは声を張り上げて元気な勉強ぶりを見せていた。母親教室も、木陰にたそがれが迫る中で熱心に耳学習が続けられていた。彼女らは伏し目がちに私たち一行を見つめ、何かをおしはかろうとしているかのようであった。

現地で働くNGOの面々は、村人になじみ生活に溶け込んで、期待と信頼が十分に寄せられていた。日本からの和田女史も現地服をキリリと着こなして意欲的な活動ぶりで、国際貢献の最先端に立つ姿に感銘深いものがあった。

「私の小さい頃も学校へ行けない子供はたくさんいました。しかし勉強は本人のやる気さへあれば、どんな中でも出来る。最後まで頑張りぬいて下さい」と別れの挨拶。若い校長がハキハキとお礼の言葉をのべていた。

ドウマルワナ統合教育校は素晴らしい発想であると思えた。普通校が不足している位だから専門校の道は遠い。統合校は实际的である。しかし、



●ドウマルワナ校にて（下段中央が小堀さん）

これも当人の人一倍の忍耐力と向学心がなければ、続くものではないと思われる。寄宿舎では交流団のために楽器演奏を披露してくれた。舞台に腰を下ろしての息の合った曲を無心に奏でる少女の髪に可愛いリボンが大きくゆれていた。

因習の中で生きる障害児たち、時には顧みられない辛さにどう耐えているのであろうか。障害者の全体像もつかめない様で、失明者の死亡率も極端に高い…とか。彼等の心の痛みを汲むNGOメンバーに心からの賛辞を贈りたい。

そのNGOメンバーとのミーティングは活発に弾む様に交わされた。「このような状態では隙がない。何をどこまで支援するのか」「我々としては彼等の現状をこの国の平均ラインまではもって行きたい」。リーダーは幅の広い問いかけにも的確に答え、誠実味と行動力あふれる、大変に信頼を集めている人物と思われた。雨風が吹き込むネパール式寺子屋の子供たちの目にふれて、「ムカ

バック「突然キレル」日本の子供たちの事が気になる。ナイフを巡って正当防衛論まで飛び出す教師や大人たち。ネパールの貧しい人々に恥ずかしいと思う。日本の昔の寺子屋の教材の一節に「飽食暖衣逸居して教えざれば即ち禽獣に近し」とあったそうだ。食べたいだけ食べ、着たいだけ着て、何となく暮らして教育がなければ、その人間は鳥や獣に等しいものになるという訳である。今、日本人なら大人も共に頭をたれて承るべきではなかろうか。教育のバックボーンを厳しく実践し、小さくなった世界から頼りにされながら、ますます格差が開くであろう途上国の人々の痛みを手を差しのべるには、国際ボランティア貯金は打ってつけの足掛かり。2万4千局が基点となって草の根運動へ発展させたいものだ。

めざすは障害者の真の自立！

寺谷 寛

インドとの国境に近いランプール村。われわれが足を踏み入れたこの農村は、飢えと貧困にあえぐ「世界最貧国」のイメージとは異なり、南アジアの陽気さを感じさせた。この村のあるナラヤニ県バラ郡は、かつてはマラリアが蔓延したジャングル地帯だったという。今でも住民の栄養状態は悪く、ビタミンAの欠乏などによる栄養障害やトラコーマ、白内障などが原因で失明が後を絶たず、ネパールでも最も失明率が高い。

東京ヘレン・ケラー協会はこの地域でネパール唯一の盲人援護団体、ネパール盲人福祉協会とタイアップし、視覚障害者のリハビリや自立に向けた支援活動を行っている。その活動の柱になっているのが「CBR」と呼ばれる地域社会を基盤としたリハビリテーションだ。障害者に対する偏見や差別意識を取り除き、家族や地域などの理解を得ながら自立をめざすことを最終目標にしている。日本でもかつてはそうであったが、ヒンズー教の影響が強いネパールでは、その偏見は想像以上である。「神の祟り」「穢れ」「呪い」だと盲信し、家族も障害者がいることをひたすら隠そうとする。そうした迷信を打ち破り、障害者の地域での自立を手助けしている。

村に住む全盲の若い女性の家庭を訪ねた。彼女は家族と一緒に牛を飼育しながら経済的に自活し



●NAWB本部にて事業説明を受ける寺谷さん

ている。目の前で慣れた手つきで包丁で干し草を切ってみせ、家族は「家計も助かる」と喜んでいった。自立を助けたのが、貸し付けローンの制度である。彼女はローンを借りて牛を買い、ミルクの売り上げの半分はローンの返済に、残りは生計に充てる。すでに返済も終わり、最近、子牛も生まれたという。彼女は成功のモデルである。ほかにも野菜づくりや竹籠づくりなど、この制度の支援を受けている障害者は百五十人以上に上り、徐々に家族や周りの意識も変わっている。

協会の活動で特に注目されるのは、いずれも事前の調査を行い、何が必要か、どのような方法が効果的かなど、その地域に合ったプログラムを考えながら、現地に根ざした活動が続けていることである。押しつけにならないよう、自主的な活動をサポートする。現地の人たちの生活や習慣を尊重することで理解を得、着実な成果を上げている。その地道な取り組みが印象に残った。

障害者のほとんどが農村地域に住むネパールのような途上国では、施設中心の欧米型の福祉には限界がある。逆に、地域に根ざしたきめ細かい活動が求められ、期待も大きい。

協会の取り組みが成果を上げている最大の理由は、ネパール盲人福祉協会という現地のカウンターパートを得ていることであろう。活動的で優秀なスタッフを持ち、良好なパートナーシップが守られ、現地の人たちの信頼を得ていることを実感した。その活動を資金的に支えているのが、郵政省の「国際ボランティア貯金」であり、世界でも新しい形の国際援助として注目されている。現地との架け橋となるNGOの役割は、ますます重要になってくるだろう。

ネパールでのボランティア活動

当協会は、事業パートナーであるネパール盲人福祉協会（カトマンズ）でスタッフへの日本語教授と点字教科書製作の手伝いにあたってもらうボランティアを派遣しています。このボランティア活動に参加される方は、学生から社会人、主婦に至るまで実にさまざま。実際お会いして話を聞くと、今更ながら人の生き方はそれぞれということに気づかされます。ここに紹介する大学生の大橋さんもそれを強く感じさせてくれた一人です。ネパール滞在中の短期間でネパール語の日常会話をほぼマスターしたことは、私たちは勿論、現地の人をも驚かせました。また、ボランティア活動にとどまらず、当協会の事業そのものにも強い関心を示し、カトマンズから更に、ジープで飛ばしても6時間はかかるインド国境に近いバラ郡まで私たちに同行したボランティアは大橋さんが初めてでした。そこで早朝から日暮れまで一日中、視覚障害者宅を戸別訪問したり、盲児が勉強している学校を見学したことは、大橋さんにとって貴重な体験となったことは間違いないでしょう。海外経験は今回が初めてだったとのことですが、その後の一人旅でさらなる自信と逞しさを身につけられたようです。

この原稿を依頼した時、無事に就職が内定したという嬉しい知らせをご本人から聞くことができました。本当におめでとうございました。

懐かしのネパリタイム

大橋 康史

僕がカトマンズでボランティアをしていたのは1997年10月と11月の2カ月間。怠け者の僕は週に3～4日ほどネパール盲人福祉協会（NAWB）でボランティアをするだけだった。

今では考えられないことだが、毎朝7時に起床。常宿の「ペンションさくら」で朝食を食べた後、9時半ころに出発。自転車と人と車でいっぱいの中古車の街を30分ほど歩きながら10時にNAWBに到着。で、すぐに仕事にかかるかというとそんなことなく、ネパール人のスタッフとおしゃべり。みんな、手が動いているのと同じくらい手を休めてしゃべっている。

昼休みを挟んで、5時まで再びプレスの仕事。そうそう、僕がやっていたのは、点訳の打たれているプラスチックの版に紙を挟んでプレス機に通すという作業。で、この作業をのんびりと5時までしたあと、事務長さんに時間がある日は日本語の個人指導をしてから、ない日はそのまま帰宅。

途中、おいしそうなシェクワ（ネパール風焼き鳥）の匂いに誘われて立ちよったり、レストランで夕食を食べたりしてから「ペンションさくら」に帰る。それから本を読んだりしながら過ごして、9時ころに就寝。これが僕のカトマンズの日々



●生徒に囲まれる大橋さん（シャンティ校にて）

だった。

でも、ある日、「僕はこの国の盲人のために本当に役立っているのか？」という疑問を抱いてしまった。カトマンズにいても、盲人に会う機会はほとんどない。まして僕が作っている点字の教科書を必要としている盲人に会う機会などなかった。もしネパール人スタッフがもう少し熱心に働けば、僕は不要なんだと覚えてしまったのだった。

ちょうどそんな時、ヘレン・ケラー協会の人々がバラ郡でのフィールドワークのためにやってきた。

僕の専攻は人文地理学で、ヘレン・ケラー協会のバラ郡でのプロジェクトは学問的に関心をもっており、一緒に連れて行ってもらえるようお願いしていた。そんなわけで、点字出版のボランティアに疑問を抱いていた時期でもあり、僕は最も盲

の多いバラ郡にヘレン・ケラーの方と一緒にいったのだった。そしてバラ郡では、僕は僕らが作った点字教科書を実際に使用しながら授業を受けている盲人に会うことができた。また、現地の社会・習慣の中でがんばってプロジェクトに取り組んでいるネパール人スタッフに会うこともできた。

そんな人々に会っているうちに、自分のやってきたことも役に立っているんだ、と僕は実感したのだった。そして、日本の価値観が正しいわけではなく、ネパールの価値観と共存することが大切な

んだ、という言い古された言葉がわかったような気がした。

バラ郡から帰ったあと、僕はインドに旅立った。それから3カ月半ほどインドや東南アジアを旅行したが、今でも一番最初に思い出すのはネパールでのゆったりとした日々のことである。いつかまた、僕の好きなネパールに行ってネパールの空気の中で生活したい。そんな風に思いながら僕は忙しいジャパニタイムの中で生きている。

音読公演「永遠のジャック&ベティ AMERICA ON MY MIND」を後援

あなたは「ジャック&ベティ」をご存じですか。そうです、昭和30年前後に中学生用の英語教科書として日本で広く使用されていたものです。国際化が当たり前の現代、日本の英語教育もそれに対応できるものが求められています。教科書も以前に比べ、実践的な会話中心のものへと変わってきているようですが、そんな時代だからこそ、「ジャック&ベティ」にはストーリーの面白さをはるかに越えた滑稽さを覚えるのではないのでしょうか。

その滑稽さを音楽と朗読の組み合わせにより、さらに引き出したのが、昨年7月4日、「ヤマハ・レクトーンシティ渋谷」にて開催された当協会後援、(株)アワーズのプロデュースによる音読公演。

表題の清水義範原作「永遠のジャック&ベティ」他、日本人にとってのアメリカをテーマにして選んだ6作品を現役のアナウンサーらが心をこめて聞かせてくれました。なお、チケット売り上げの一部が(株)アワーズにより、当協会のネパール盲人援護事業に寄付されました。



国際協力フェスティバルに参加 活気に満ちた2日間

10月6日は「国際協力の日」。その日にちなんで毎年開催されている「国際協力フェスティバル」が1997年10月4・5日の両日、日比谷公園で開催され、当協会も参加しました。

以前、当協会のネパールにおけるボランティア活動に参加していただいた方などの協力を得て、ネパール民芸品の販売や、当協会ニュースレターの配布、活動写真展示などをおこない、当協会の活動をアピールしました。



●御協力いただいたボランティアの方々

初日は午後から雨が降り始め、あいにくの天気となりましたが、会場の活気に水を差すほどのものではありませんでした。2日目は前日の雨も朝にはすっかりあがり、すがすがしい秋晴れの下、終始和やかな雰囲気包まれたフェスティバルとなりました。

主催者発表の来場者数は2日間総計で15万人を越え、多くの方々に当協会の活動を知っていただくことができました。

ご協力いただきましたボランティアの皆様には、心から感謝申し上げます。

ネパール出張だより

◎ネパールの熱い夜◎

点字出版局 森田 伸

8月初めの土曜日の夜、わが家のクーラーが突然動かなくなった。窓を開けて風を入れようと思ったが不幸にもまったくの無風状態。押し入れから久しぶりに扇風機をひっぱりだしてきたが、なかなか眠れない。蒸し暑さにうめきながら思った。「まるでネパールみたいだ。」

2回目のネパール訪問は5月の下旬。2年前の前回と同じ、当地では一番暑い時期だ。カトマンズは相変わらず人と車にあふれ、排気ガスと砂ぼこりにまみれた町。そしてやっぱり暑かった。



●N A W B点字出版所に機械点検をする森田

ネパールでは停電は事故ではない。発電量が絶対的に足りないため、今日はこのブロック、明日はあのブロックと、計画的に停電させるのだ。ちょうど寝ようとする時間に電気が止まっているので扇風機は使えない。網戸がないので窓も開けたくない（蚊取り線香はあるが、ヤモリなどが入ってくるかもしれないので）。今晚はこのまま眠れないのではと思ったころ、ようやく扇風機が動き出した。

バラ郡はもっと暑い。ここでは夜はC B Rセンターの所長が行きつけの飲み屋に連れて行ってくれたのだが、当然のように停電している。天井の大きな扇風機はただのオブジェだ。真っ暗な中でろうそくの明かりを頼りにコーラを飲み（わたしは酒が飲めない）、シェクワという焼き鳥を食べる（正しくは焼き山羊だが）。これは結構う

まいのだが、まさに滝のように汗が流れ、顔から腕からしたたり落ちる。まるでサウナで食事をしているようだ。しかし所長は涼しい顔をしてビールをうまそうに飲んでいる。さすが地元の人は違うと感心する。

ところが幸いにも、この夜泊まったホテルには何とクーラー（日本製）がついていた。冷房付きの部屋で寝るのは初めてだ。涙が出るほどうれしかった。もっとも断続的な停電でしばしば止まりはしたが。

しかしよく考えてみると、子供のころにはわが家にクーラーなんてなかった。夏の夜は窓を大きく開け、蚊帳を吊って寝ていたものだ。夏は暑いものだと思っていたし、また自然の風だけで十分涼しかったような気がする。が、今や冷房がないと寝られないようになってしまった。いったいいつからこんなに贅沢になってしまったのだろう。

ネパールは昔の自分を思い出させてくれるタイムマシンのような国だ。

ちなみにわが家のクーラーは修理不能で結局買い替えることになった。私が小学生のときから使っていたが、ついに寿命が尽きたのだった。

◎10年目の別れ◎

海外事務局 根本厚志

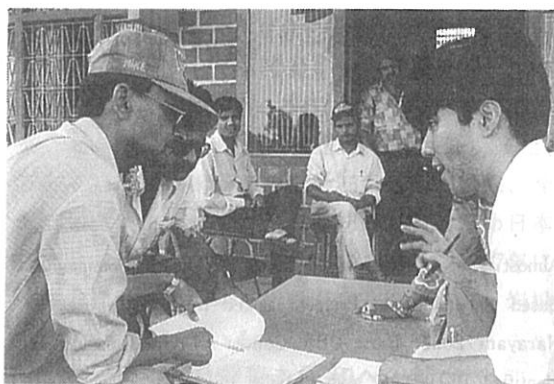
1985年にスタートした当協会のネパールにおける視覚障害者援護事業。当初は点字教科書発行のみだった事業もその後順調に拡大。1989年からインド国境に近いナラヤニ県バラ郡においてC B Rと呼ばれるリハビリテーション・プログラムを展開している。バラ郡はネパールで最も失明率の高い地域の一つ。現地スタッフが自転車で視覚障害者の家庭を戸別訪問し、歩行訓練や必要な日常生活訓練を施している。

地元紙に広告を出し大々的に行った最初のスタッフ採用では、20名の求人に対し100名以上の応募があった。厳選されたスタッフはいずれも地元への深い愛着と視覚障害者の置かれている悲惨な現状を打開しようという気概を持った若者たち。

当初は3年間の計画でスタートしたが、その成

果とスタッフの献身的な仕事ぶりが現地住民の熱い支持を得て、これまで継続してきた。しかし10年目を迎えた今年7月、同プログラムは既にフォローアップ段階に移行したとして、規模縮小に伴うスタッフの削減が行われることとなった。再度の厳選により、17名いたスタッフは今頃は7名となっているはず。

私が17名のスタッフ全員と最後に会ったのは縮小まであと1カ月と迫った今年5月下旬。これまで何度も行ってきたバラC B Rセンターでの協議は、いつもと変わらず肅々と進行した。しかし、話が今後のことに及ぶとさすがに彼らの刺すような視線を意識せずにはいられなかった。それでも、彼らは自分たちの先行きだけを案じているわけではなかった。事業全体の成功を心から願い、とりわけ視覚障害児の教育プログラムの成功に自らの夢を託しているかのような顔だった。この時、私は改めて彼らと出会い、ともに仕事ができたと感謝した。



●バラC B Rセンターでの協議

協議終了後、スタッフのどれれそれがC B Rセンターを去りインドへ行くというような会話が続いた。その中で、スタッフ同士が結婚することを聞いた。目の前には控えめな笑顔の2人がいた。明るい話題には違いないが、これも人員削減が影響してのことだけに、複雑な気持ちになった。今後この2人に会うことはあるのか、私には分からなかった。

「釈迦生誕の地を訪ねて—スタディツアー実施のお知らせ」

おかげさまで皆様から大変なご好評をいただいているスタディツアー。今年も実施の運びとなりましたので、早速お知らせ致します。

今回旅行するのは、当協会が視覚障害者援護事業を行っているネパール。そしてツアーの大きな目玉としたのが、釈迦生誕の地として世界的に知られるルンビニ訪問です。もちろん釈迦の沐浴場やアショウカ王の石柱などを見学しますが、それだけではありません。ルンビニにおいて視覚障害者の就学を支援しているシャンティ統合教育校を訪問し、盲児童や先生方との楽しい交流を図ります。

ルンビニ以外にも、ヒマラヤ連峰を望めるネパールの景勝地ボカラ、象のサファリやカヌー体験など自然を満喫できるチトワン国立公園、最後に中世の面影を色濃く残す首都カトマンズと、ネパールの魅力をすべて網羅するツアーとなっています。

日程は11月29日、関西国際空港からカトマンズへ直行。30日、空路ルンビニに入り、巡礼の

旅へ。12月1日、シャンティ統合教育校を訪問した後、チトワンへ。2日、ボカラへ。3日、カトマンズに戻り、ネパール盲人福祉協会訪問。4日、5日、カトマンズ市内観光。そして6日に帰国となります。料金はお一人34万円。全盲の方の単独参加は手引料として10万円プラスとなります。なお参加者が15名に達しない場合、中止となることもありますので、その点ご了承ください。詳しくは海外盲人援護事業事務局(03-3200-0810) 根本までお問い合わせ下さい。



●前回のスタディツアーから (ネパール)

AID PROJECT IN NEPAL FISCAL 1997 (1/4/1997 - 31/3/1998)

BARA CBR PROJECT

Almost 9 years have passed since Bara CBR (Community-Based Rehabilitation) Project started in Bara District in Narayani Zone. Bara CBR Center provided 54 newly identified BVI (Blind and Visually Impaired) persons with counseling, mobility and daily living skill training. Bara CBR Center conducted follow-up program for 258 BVI persons who had already received the training. Regarding BVI persons who have been aiming to be self-sustaining, Bara CBR Center provided income-generating loan to them, which enabled them to earn their own living by means of raising livestock, making rope, and so on. Bara CBR Project is highly evaluated as one of the most successful case of CBR Projects, since it has offered the most suitable rehabilitation training to each BVI person. With a constant effort of NAWB (Nepal Association for the Welfare of the Blind), Bara CBR staff and THKA (Tokyo Helen Keller Association), there is an increasing number of BVI persons who were benefited by this project.

Bara CBR Project is supposed to continue after its restructuring planning to be done in July this year.

BRAILLE BOOK PRODUCTION

NAWB Braille Printing House produced 1,893 braille textbooks for school education from 1st grade to 12th grade. Then 1,355 textbooks were distributed to 440 Blind children at 26 Integrated Education Schools including 1 blind school. Also, 500 braille calendars were produced and distributed to Integrated Education Schools and facilities concerned.

INTEGRATED EDUCATION PROGRAM

There are about 30,000 blind children aged between 6 and 15 in Nepal. At present there are about 440 blind children who are given opportunities to go to school.

We extended and conducted Integrated Education Program for blind students of 3 schools (25 students) in Bara District. Also, we conducted same program at each school

in Rautahat (16 students), Rupandehi (17 students), Gorkha (15 students) and Palpa (17 students) District. As a result of this program, the number of blind children going to school has been increasing year by year.

To develop the program, NAWB conducted 1 workshop and 1 training for the resource teachers of Integrated Education Schools.

PRIMARY EYE CARE AND EYE CLINIC

At Eye Clinic of Bara CBR Center, 3 ophthalmic assistants are being stationed and rotating to care eye patients there. And 6,922 patients were treated there from March 14th, 1997 to March 13th, 1998.

Also, regarding patients in danger of losing their eyesight, Eye Clinic arranged that they have operations at Kedia Eye Hospital and some Eye Camps to prevent them from getting into blindness.

Bara Eye Clinic has been contributing to prevention of eye disease for local people who had hardly received the treatment before because there were not any eye hospitals near their houses.

To develop the prevention of eye disease, Bara CBR Center conducted Primary Eye Care Workshop twice for local people. It also conducted itinerant lecturing for 2,649 students and local people to spread the knowledge of nutrition and hygiene focusing on taking Vitamin A.

PUBLIC RELATIONS, EVENT, AND FUND-RAISING CAMPAIGN

THKA backed up a reading performance "Eternal Jack & Betsy - AMERICA ON MY MIND" (July 4th, 1997)

THKA participated in International Cooperation Festival at Hibiya Park and did publicity activities such as photographic show and distribution of newsletters "LIGHT OF LOVE" (October 4th and 5th, 1997)

THKA's project in Nepal was introduced by a magazine specializing in diplomatic matters. (April issue of "GAIKO FORUM")

1997年度事業報告（1997年4月1日～1998年3月31日）

1. 視覚障害者リハビリテーション（CBR）事業

ナラヤニ県バラ郡においてCBR事業を継続実施した。本事業は本年6月で開始9年を経過。バラ郡全域を対象にした戸別訪問再調査により新たに発見された視覚障害者54名に対し、更生相談、歩行・日常生活技能訓練を実施した。また、すでに基礎訓練を終了した視覚障害者延258名に対してはフォローアップを行うとともに、その内の職業的・経済的自立を目指す視覚障害者に対しては自活生産資金を貸し付け、家畜の飼育や縄網作りなどの職業に従事させている。過去9年間で701名の視覚障害者を発見し、各自に適したリハビリテーションを施した本CBR事業は、最も成功したCBRケースとして高い評価を受けている。なお本年7月以降は完全なフォローアップ段階に入るため、現地スタッフ数を大幅に削減したうえで、事業は継続されることになっている。

2. ネパールにおける点字出版事業

ネパール盲人福祉協会（NAWB）点字出版所にて、初等～高等教育（第1～12学年）課程の点字教科書1,893冊を製作し、ネパール全土の統合教育校26校（盲学校1校を含む）の約440名の盲児童に1,355冊配布した。また、点字カレンダーを500部作成し、統合教育校や関連施設に配布した。

3. 統合教育事業

- ①バラ郡の統合教育校3校（盲児童25名）にて、引き続き統合教育プログラムを実施した。また、ロータート（盲児童16名）、ルバンディヒ（盲児童17名）、ゴルカ（盲児童15名）、バルバ（盲児童17名）各郡の拠点統合教育校においても同様のプログラムを実施した。本統合教育事業により盲児童の就学は年々増加している。
- ②ネパール盲人福祉協会にて、英語点字の略字の習得を目的とした「全国統合教育講習会」を開催した。参加者は全国の統合教育担当教師14名など。（1998年3月23日～27日）
- ③ネパール盲人福祉協会にて、統合教育担当教師研修を実施した。参加した教師は5名。（1997年3月30日～5月10日）

4. 眼科診療と失明予防

- ①バラCBRセンター眼科診療所において、バラ郡の眼疾患患者6,922名の診療を行った。また、診療の結果、

手術の必要があると判断された患者については、アイ・キャンプや眼科病院にて開眼手術を受けさせた。当診療所は、眼科病院が無く放置状態にあった地域住民の失明予防に大きく貢献している。

- ②バラCBRセンターにおいて、地域住民を対象に「失明防止講習会」を2回開催した。（1997年5月6日、12月11日）
- ③学校や村落を巡回し、2,649名の児童・住民に検診や講習を通して、ビタミンA摂取の重要性を中心に、栄養知識や公衆衛生知識の普及を図った。

5. 技術指導と事業管理

点字出版局の協力を得て、NAWB点字出版所において同スタッフに対する技術指導を実施した。また事務局スタッフを派遣し事業管理を行った。

- ①1997年5月18日～6月1日
事務局スタッフ2名（事業管理、技術指導）
- ②1997年11月19日～12月3日
事務局スタッフ2名（事業管理、技術指導）
- ③1998年3月4日～3月11日
事務局スタッフ1名（事業管理）
出版局スタッフ1名（技術指導）

6. 広報・イベント・募金活動

- ①97年7月「愛の光通信」第12号を発行して広報・募金活動を行った。
- ②97年7月4日、音読公演「永遠のジャック&ベティ AMERICA ON MY MIND」を後援。
- ③97年10月4日・5日、日比谷公園で開催された「国際協力フェスティバル」に参加。活動写真の展示やニュース・レター配布などを行い、ネパールにおける活動をアピールした。
- ④98年3月、当協会の活動に関して「外交フォーラム」誌の取材を受ける。（同誌4月号に記事掲載）

7. 海外ボランティアの派遣

日本語講師および点字出版作業のボランティアとして、3名をネパール盲人福祉協会に派遣した。

- ①大橋 康史さん（1997年10月6日～12月1日）
- ②田中 靖子さん（1997年12月9日～1998年1月12日）
- ③藤井 啓輔さん（1998年1月7日～1月30日）

1997年度収支計算書

 自 平成9年4月1日
 至 平成10年3月31日

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
事 務 費	2,113,157	寄 付 金 収 入	10,594,329
賃 料 費	410,000	協 賛 金 収 入	1,513,500
旅 費	26,180	助 成 金 収 入	5,980,000
消 耗 品 費	238,508	募 金 収 入	3,100,829
印 刷 費	835,600		
役 務 費	522,667	繰 入 金 収 入	300,000
雑 費	80,202	本部会計繰入金収入	300,000
事 業 費	6,959,762	事 業 収 入	235,000
海 外 出 張 費	1,520,390	販 売 収 入	235,000
海 外 援 助 費	5,419,126		
雑 費	20,246	雑 収 入	18,052
		雑 収 入	18,052
小 計	9,072,919	合 計	11,147,381
当 期 繰 越 金	2,074,462		
合 計	11,147,381		

貸借対照表

平成10年3月31日現在

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産	11,253,249	繰 越 金	11,253,249
現 金	13,644	前 期 繰 越 金	9,178,787
預 金	11,236,605	当 期 繰 越 金	2,074,462
立 替 金	3,000		
資 産 合 計	11,253,249	純 財 産 合 計	11,253,249

海外援護事業記録

(1997/6 - 1998/5)

97年6月 *国際ボランティア貯金配分金決定 (6/13)

 7月 *音読公演「永遠のジャック&ベティ AMERICA
ON MY MIND」を後援 (7/4)

*「愛の光通信 No.12」発行

 10月 *日比谷公園で開催された「国際協力フェスティ
バル」に参加 (10/4,5)

 *日本語講師・点字出版ボランティア大橋康史
さんをNAWBに派遣 (10/6-12/1)

 11月 *技術指導・事業管理: 佐々木、根本
(11/19-12/3)

 12月 *日本語講師・点字出版ボランティア田中靖子
さんをNAWBに派遣 (12/19-1/12)

 98年1月 *日本語講師・点字出版ボランティア藤井啓輔
さんをNAWBに派遣 (1/7-1/30)

 2月 * (財) 国際ボランティア貯金普及協会からの交
流団が、NAWB点字出版所及びバカCBR
センターを訪問 (2/3,4)

3月 *技術指導・事業管理: 根本、古澤 (3/4-3/11)

5月 *技術指導・事業管理: 根本、森田 (5/24-5/31)

98.4月号「外交フォーラム」に当協会の活動紹介

寄付者ご芳名 (五十音順・敬称略) 1997年7月1日—1998年6月30日

温かいご支援ありがとうございました

(個人)

青木 貞子	青木 ヒサ	青木 正樹	秋山 俱子	浅倉 久志	浅田 清香
安孫子 政夫	阿部 淳	天野 治夫	荒木 薫	荒田 佐多子	在田 一則
有本 成子	安藤 生	飯田 深雪	井口 立己	石井 浩介	石井 元一郎
石川 はな	石川 尚代	石原 幸栄	石光 貞子	石山 米造	板橋 正人
市角 誠	市田 克彦	市原 政春	出光 永	伊藤 定善	伊藤 正男
井淵 博	今泉 新治	井村 恵津子	入江 一恵	植竹 清孝	上田 文良
上野 伊津子	上村 香代子	上村 健次	鶴飼 信子	牛若 寛治	内田 和子
遠藤 利三	遠藤 陽一	遠藤 義一	大内 三良	大岡 信	大河原 正子
太田 義秋	大月 善三郎	大西 正広	大橋 東洋彦	岡野 マスミ	尾形 仂/雅子
岡本 恒夫	沖野 外輝夫	小倉 淳	小河 静	尾関 育三	小田 淳
小野 日央	小野塚 耕吉	小幡 欣治	折戸 正明	貝元 利江	賀川 友吉
加来 典子	加治 甚吾	片桐 光治	片桐 武昭	片山 文彦	勝又 誠子
加藤 晃	加藤 万利子	金澤 倫子	金森 なを	金子 俊介	金田 一郎
谷 辰夫	香山 千加子	唐沢 国雄	川崎 力	川島 玉子	川尻 哲夫
河田 満	川村 良子	木崎 甲子郎	北浦 喜久子	北浦 滋夫	木塚 泰弘
木村 勝久	木村 ちづ子	鞍谷 清孝	黒田 昌宏	小泉 周二	河野 康弘
河野 由紀子	神山 貞子	小笹 孝	小島 和雄	小林 一弘	肥塚 隆
肥塚 美和子	後藤 良一	呉矢 秀信	近藤 文郷	紺野 敏雄	斉藤 惇生
斉藤 ミサ	三枝 礼子	坂入 操	佐藤 テル	佐藤 利村	佐藤 久夫
佐藤 弘子	塩崎 悦万	塩月 弥栄子	篠田 純男	島倉 忠行	清水 はつ
下沢 仁/幸子	下田 玲子	春風亭 柳昇	白井 雅人	新谷 君子	新福 三郎
末吉 恵利	鈴木 明恵	鈴木 勝利	鈴木 文子	鈴木 雅夫	鈴木 はる子
清宮 篤志	関 陵子	染矢 朝子	高橋 輝雄	竹田 功	竹村 実
田中 さ加恵	田中 茂	田中 徹二	田中 正和	田中 雅治	谷 智仁
秀明	辻井 喬	椿 久美子	寺島 アキ子	照井 博	当津 純一/順子
当山 啓	鳥羽田 節	外山 雄三	鳥山 由子	中尾 照美	中川 みどり
中島 章	長島 好夫	中曾 栄吾	永田 三郎	永野 耐造	中村 保信
長屋 久美子	中山 弘子	西澤 憲一郎	西條 一止	野口 三男	橋本 時代
橋本 幸信	長谷川 一郎	八田 公雄	畑中 良輔	端山 智弘	花田 重信
林 大	林 紘子	原田 美男	春尾 千代子	桧山 寿子	檜山 美代子
平塚 尚一	藤森 泰	古市 薫	星野 彰	本間 一夫	本間 保実
牧 茂美	増田 光子	増田 守男	町田 英一	松尾 宏之	松田 節子
松谷 まき子	松葉 恵/幸子	松本 滋	丸山 雄一郎	三浦 綾子	水野 まち子
御本 正	宮崎 勇	宮原 満洲男	目黒 千代子	森 典子	守橋 明德
両角 征吾	森林 成生	森村 誠一	諸藤 フサ子	谷地 教子	藪内 清
山田隆造/元子	山田 あき子	山辻 英也	山根 昭市	山本 景子	湯浅 道男
横山 まさみち	米田 昌徳	蓼 胡競	若狭 裕二	若林 弘子	渡辺 直明

(団体)

(株)アワーズ

(有)大本印刷

高松キワニスクラブ

株式会社マセプロダクション

(株)アトペンチャーロード

学友会

錦紙商事株式会社

間宮製作所

医道の日本社

小林動物病院

日産化学工業(株)

武蔵野女子学院生徒会

大阪府立盲学校職員有志

高垣商店

日本障害者リハビリテーション協会

◆CONTENTS◆

- ・理事長より
ネパール援護事業に向けられた
熱い支援に胸をうたれて…… 2
- ・統合教育の現場から
～待たれる新寄宿舎～…………… 3
- ・第5回ヘレンケラー・サリバン賞、
初代NAWB会長プラサド氏に…… 4
- ・国際ボランティア貯金
預金者代表団の現地交流…………… 6
- ・ネパールでのボランティア活動…………… 8
- ・ネパール出張だより…………… 10
- ・釈迦生誕の地を訪ねて
スタディツアー実施のお知らせ…………… 11
- ・97年度事業報告（英文）…………… 12
- ・97年度事業報告（和文）…………… 13
- ・97年度収支計算書、
海外援護事業記録…………… 14
- ・寄付者ご芳名…………… 15

東京ヘレン・ケラー協会
オリジナル・テレホンカード
頒価：2,000円（2枚セット）



ヘレン・ケラー女史のポートレートと、ヒマラヤを背景に日本の盲人がトレッキングを楽しんでいる様子をデザインしたオリジナル・テレホンカードの2枚組。とりわけ女史の自筆サイン入りの写真は貴重です。なお、本テレホンカードの純益はすべてネパールの盲人援護に使われます。

募金をお願い

ネパールにおける失明防止と視覚障害者援護をさらに充実するために、募金をお願い致します。
寄付金のご送金は、下記口座をご利用下さい。

郵便振替：00150-5-91688
銀行口座：さくら銀行新宿支店（普）5101190

寄付金に対する減免税措置

東京ヘレン・ケラー協会は、所得税法施行令第217条第1項第5号および、法人税法施行令第77条第1項第5号にかかざる社会福祉法人でありますので、当協会に対するご寄付は、所得税法第78条第2項第3号、法人税法第37条第3項第3号の規定が適用され、税法上の特典が受けられます。

編集後記

この夏の不順な天候に影響されたわけではありませんが、今年の編集作業はずるずると長引いてしまいました。しかし何と言っても一番ぐずついているのは日本の景気でしょう。ニュースなどで耳にするのは、どれも悲観的な報道一色で、正直気が滅入ってしまいます。そんな時、思い出すのはネパールでの会話。

日本の景気低迷を説明すると、返ってきた反応は「この国の失業率は80%を越えている」といった実にあっさりしたもの。日本の失業率などはものの数ではないといった感じです。確かにネパールから見れば、それも自然な考え方です。視点を変えれば、楽観的にもなれるということですが、それでも、私は景気回復を強く願わずにはられません。（A・N）



**TOKYO HELEN KELLER
ASSOCIATION**

Established 1950

14-4, Ohkubo 3-chome, Shinjuku-ku, Tokyo 169-0072, Japan

発行：社会福祉法人 東京ヘレン・ケラー協会
海外盲人援護事業事務局

住所：〒169-0072 東京都新宿区大久保3-14-4
TEL：03-3200-1310 FAX：03-3200-2582
E-mail：XLY06755@niftyserve.or.jp